海と空

ルールー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海と空

【Nコード】

N8118W

【作者名】

ルールルー

【あらすじ】

藍と陽は半分だけ血の繋がった異母姉弟だった。明るくひょうきんな父と三人で暮らしている。このまま慎ましくも幸せな生活が続くのを願う藍だったが、時の流れは少しずつ家族を取り巻く環境を変えていってしまう。

藍と陽

「ただいまー」

藍が台所でジャガイモの皮を剥いていると、陽が帰ってきた。

「あれ。バイトは？」

藍は驚いて振り返った。今日は父も弟も遅いと思い、今御飯を作り始めたばかりなのだ。

「休み」

「え～。それならそうと言ってよ」

「言ってなかったっけ」

陽は鞄を置き、制服のネクタイを緩めながら台所に入ってきた。

「何作ってんの？」

「ビーフシチューとマリネ。お隣りからたくさんジャガイモ貰ったから、しばらくはジャガイモ三昧だよ」

「へー」

陽は腕をまくった。

「手伝おうか」

「いいよ。お腹すいたでしょ？　先に何か食べちゃえば？」
「別にいい。てか、今日父さん遅いし、飯食いに行こうよ」
「でもお金が……」
「今日俺、給料日」
陽は右手でお金のマークを作り、にっと笑った。藍もつられて笑顔になる。
「あたし、お寿司がいいなー」
「ちらし寿司でいい？」
陽は笑いながら戸棚からボールを取り出し、塩水を張って、剥いたジャガイモをそれに浸した。
「帰ってから一緒に作ろうよ」
「どうせお父さん食べるよね」
父は今日は職場の人と飲みに行っているのだった。酒を飲む時にあまり食べない父は、家に帰ってから何か食べることが多い。
「俺、着替えてくるから」
陽はそう言って二階の自分の部屋へと上がっていった。

「お寿司って言うのは冗談だったんだけどな」
近所に新しくできた回転寿司屋に二人は来ていた。
「一回行ってみたかったんだよ。全皿１０５円だから問題ない」
陽はさっそくはまちを口に運び、「うまい」と言った。
「デザートも色々あるのね」
藍はチーズケーキやプリンが回っているのを見て、目を輝かせている。
「好きなだけ食べなよ。藍は痩せ過ぎなんだからさ」
「普通だよ」
藍はTシャツから出ている自分の腕を見た。
「男からしたら、ちょっと物足りない」
「ひどーい」
藍が叩く真似をすると、陽は笑った。あちこちで同じように笑い声

が聞こえている。

「ね、久しぶりだね。外で一緒にご飯食べるの」

「そうかな」

「高校生になって、陽がバイト始めて忙しくなったし」

「ごめんな。藍ばっかり家のことさせて」

「そうじゃなくて。何か子供の頃に戻ったみたいで嬉しい」

二人がまだ小学生だったとき、月に一度父が外食に連れて行ってくれたものだ。あの頃の陽は、今のようには笑わなかった。藍と陽は母親が違っており、五年前まで別々に暮らしていたのだ。

「でもこんなところ見られたら、また彼女に誤解されちゃうね」

陽には彼女がいる。母親に似て端正な顔立ちのため、女の子にもてるのだ。藍が知っている限りで、今まで五人の子と付き合っていた。

「藍と姉弟だってこと知ってるから大丈夫だよ」

今の彼女は二人の高校の先輩だった。大人っぽくて落ち着いた人で、端から見るととてもお似合いなのである。

「藍は彼氏作んないの？」

「あたしは陽と違ってもてないもの」

「そんなことないだろ」

陽はイクラの皿を取って藍の前に置いた。藍の大好物なのだ。

「俺、クラスの奴に藍のアドレス訊かれたことあるよ。教えなかったけど」

「ほんとに？」

藍は笑う。

「藍の相手は俺がいいって思う奴じゃないと認めないから」

「シスコン」

「お互い様だろ」

幼少期を一緒に暮らさなかったためか、二人の絆は逆に強かった。お互い父子家庭、母子家庭で育ったせいもあるだろう。孤独というものを知っており、互いの存在の貴重さをよく分かっていた。

「おいし」

藍はイクラを頬張り、笑顔になった。

「だろ。ここ結構うまいよな。今度父さんも連れてこよう」

陽はそう言って、自分もアナゴの皿を取った。

藍と陽と父

「ジャガイモ多くない？」

「これじゃ、ジャガイモシチューだね」

藍と陽は帰宅した後、一緒に料理をしていた。二人共小さい頃から作っていたため、一通りのことはできる。

「明日はグラタンでしょ。明後日は肉じゃがでしょ。明明後日はオムレツでしょ」

藍は思い付く限りのジャガイモ料理を挙げた。

「そんな無理して使わなくても、しばらく保つんじゃない？」

陽はシチューのルーを足して、鍋をかき混ぜた。部屋中にデミグラスソースの良い匂いが漂っている。

「でもあれだな。料理は少し空腹の時にやった方がいいな。何ていうか……吐きそう」

「食べ過ぎよ」

少食の藍は１０皿も食べていないが、陽は２０皿以上食べている筈だ。痩せの大食いなのである。

「休んでたら？　普段あんまりゆっくりできないんだし」

「藍と料理するのは楽しいからいいの」

「またそういうこと言って」

ジャガイモとハムでマリネを作った藍は、それを冷蔵庫にしまった。
普段はキュウリやレタスを使うのだが、以前ジャガイモでやったら、
二人に好評だったのである。

「父さんまだかな」

「二次会に行ってるんじゃない？」

「俺達もする？　二次会」

陽は藍の方を向いて、くいっと酒を飲む真似をした。

「お腹いっぱいなんでしょ」

藍は呆れて言う。

「酒は別。冷蔵庫にチューハイあったろ」

「もう、不良！」

「ちょっとだけだって」

二人共風呂から上がると、陽は自分用に梅チューハイ、藍用に桃チューハイを持ってリビングにやってきた。なんだかんだで藍もしっかり飲む。

「これ、面白いんだよ」

藍は毎週観ているバラエティー番組にチャンネルを合わせていた。

「藍の好きな芸人出てるじゃん」

陽はテーブルの上にチューハイを置くと、物珍しそうに画面を眺めながらソファーに座った。陽は普段はバイトでほとんどテレビを観ることがない。

「ぷはっ。うめ〜！　梅だけに」

陽はチューハイを一口飲んで、満足げにそう言った。

「お父さんに似てきたね」

藍が苦笑すると、ちょうど玄関のドアが開く音がした。

「あ、帰ってきた」

藍は立ち上がり、部屋の外に出た。靴を脱いでいた父親の修平が「おー、ただいま」と相好を崩す。

「遅かったね」

「カラオケ行ってきた」

藍は修平の鞄を持ち、リビングのドアを開けた。

修平はソファーでくつろいでいる陽の姿を見るなり、入口でビシッと戦隊もののポーズを決める。

「父ちゃん参上！」

「うわー……面倒くさい」

陽は思わず逃げ腰になる。

「あー！　未成年の飲酒発見！　逮捕する！！」

陽のところまでづかづか歩いていき、テーブルの前にしゃがみ込んだ。

「父さんも飲む？」

「うん」

子供のように頷く。

「何がいい？」

台所で藍が尋ねる。

「水」

「水なのかよ」
陽が笑い、藍がコップにミネラルウォーターを入れてテーブルまで持ってきた。
「今日はビーフシチューだよ。お芋ばっかりだけど」
「ほんと？　食う」
「ついでくるね」
藍は戸棚から皿とスプーンを出し、シチューを温め始めた。
「陽、週末だというのに藍なんかといちゃいちゃして……。彼女は？　デートはしなくていいのか」
酔うと陽に絡み始めるのが修平の癖だ。
「今日は予備校だから」
「ほっとかれてるのか。寂しい奴だなぁ」
修平は陽の肩を叩き、藍の方を向いた。
「藍、欲求不満の弟に何かされなかったか」
「えー？　なにー？」
藍は換気扇の音でよく聞こえないようだ。

「父さん、あんま際どいこと言わないでよ。ほんとにそうなったらどうすんだよ」

陽は小声で修平に言った。

「別にいいだろ。お前ら、ほんとは姉弟じゃな……」

陽が修平の口を塞いだ。

「何やってんの？」

先にマリネを食べてもらおうとタッパーを持ってきた藍は、二人の様子を見て怪訝な顔をした。

「あ、それ俺も貰っていい？」

陽は父の口から手を離し、笑顔を作った。

「つまみが欲しくてさ。藍は？　もう一本飲む？」

陽は立ち上がった。

「いらない」

藍が修平の方を見ると、修平は黙って水を啜り始めた。

陽と桜子

修平が陽に焼酎を勧め、結局二人で飲み始めてしまった。藍は呆れながらも二人のために酒を作り続けた。

修平が眠ってしまったのはそれから二時間後くらいで、藍は修平に毛布を掛けると、片付けるためにグラスをお盆に載せた。

「俺がやる」

陽は藍からお盆を受け取った。

「藍はもう寝な。付き合わせてごめん」

藍は陽を見上げ、「自分だってお父さんに付き合ったくせに」と言った。

「俺も飲みたかったんだよ」

陽は笑い、立ち上がって流しへとグラスを運んだ。

「二人でやった方が早いでしょ」

陽が洗剤で洗っていく食器類を、藍が水で流していく。子供の頃初めて共同で作業をしたときの照れくささを、藍は昨日のことのように思い出すことができた。

「感動したな。食器乾燥機」

陽が言った。
「洗った後拭かなくても、スイッチ一つで乾かしてくれるんだもんな」
陽は初めてこの家の台所に入ったとき、食器乾燥機を見て感激していた。陽の家は経済的に苦しく、贅沢な物はほとんど買うことができなかったのだ。
　まるで藍の頭の中がそのまま伝わったかのように陽が昔のことを言ったので、藍は少々驚いていた。
「ね、バイト代何に使う気なの？」
藍は唐突に訊いた。陽は学生だというのに週に五日もアルバイトを入れ、そのほとんどを貯金に当てている。
「欲しい物があるんだ」
陽は一瞬手を止めたが、すぐにまた洗い始めた。
「欲しい物って？」
「バイクとか」
「もうそれくらいの額貯まってるでしょ？」
高校に入ってすぐにバイトを始めて、既に一年以上が経過している。
「デート代もいるし」

「彼女受験生だし、そんなに出掛けてないじゃない。……もしかして、大学の学費？」

陽は何かと父に遠慮しているようだった。家族になって何年もたつというのに、頼みごとをするのを聞いたことがない。父はそれが不満だと、いつか酔ったときに漏らしていた。

「学費はちゃんと出してもらわなきゃ駄目よ。その分勉強が疎かになっちゃうでしょ。陽、頭いいんだから」

藍が言うと、陽は「藍は進路どうするの？」と訊いた。

「あたしは短大か専門学校に行くつもり。保育士になりたいんだ」

「ふうん……ぴったりだな」

陽は呟くように言った。

――と、食卓の上で陽の携帯が鳴った。バイブ機能にしてあったので、ヴーンと大きな音が鳴り、陽は慌てて食卓まで行って携帯を取り上げた。

幸い父は目を覚まさなかったようである。

「先輩？」

「うん」

先輩とは陽の彼女のことである。お互い勉強やバイトで忙しく、ほ

とんど電話やメールだけでコミュニケーションを取っていた。
「こっちはいいから、電話掛けてきたら？」
「いい。後で掛ける」
『電話していい？』というメールだった。夜中だし、長くなりそうなので、こういうときは外で掛けることにしている。それでも夜中に電話したいというのは彼女にしては珍しく、どうしたのだろうと思いながら陽は残りの片付けを済ませた。

「もしもし」
陽は酔いを冷ましながら近所を散歩していた。今日は天気が良かったため、星がたくさん出ている。
『ごめんね、遅くに。どうしても声が聞きたくて』
少し低めで落ち着いた桜子の声が聞こえてくる。
「ストレス溜まってるの？」
陽は尋ねた。あちこちで虫の音が聞こえていて、とてもいい気持ちだった。

『そうかも。今日授業中に陽に会いたくてたまらなくなって、ノートにたくさん“会いたい”って書きそうになっちゃった』

「そりゃ、危険だ」

陽は笑う。

『でしょ。まぁ、書いてないんだけどね』

桜子も笑いながら、それだけ好きってことよと付け加えた。

『実は今、陽の家の前に来てるの』

陽は「えっ」と大きな声を出した。

『インターフォンは押せないから、出てきて』

「どうやって来たの？　終電もうないだろ」

陽は急いで自宅へと引き返す。

『自転車で来ちゃった』

「遠いし、危ないじゃん」

陽は走り出していた。こんなことは初めてである。

『会いたかったの』

二百メートルほど戻って、すぐに制服のまま自宅の前に立っている桜子の姿を見つけた。予備校から直接来たのだろうか。

陽は携帯を閉じ、側に駆け寄った。

「どうしたの？」

「どうもしない。来ちゃいけない？」

桜子は理知的でいたずらっ子のような目を陽に向けた。

「いけなくないけど、びっくりするじゃん」

陽は桜子の頬に手を当てた。

「会いたかったのよ。ただそれだけ」

桜子は抱きついてきた。制服が汗でしっとりと濡れている。こんなになるまで必死で漕いできたのだろうか。

陽は抱き締めようとしてはっとしてその手を引っ込めた。

「場所変えよう」

「何よ、妹さんに見られたくないんでしょ」

桜子は恨めしそうに言った。

「家族の誰にも見られたくないよ。……それに、姉です」

陽は桜子の手を引き、近くの公園へと移動した。

それぞれの事情

陽と桜子は公園のベンチでキスをしていた。会えなかった時間を埋めるかのように――。

「……ふっ、お酒くさい」

桜子は笑う。

「ばれた？」

「分かるわよ」

桜子は愛おしそうに陽の髪の毛を撫でた。

「どこで飲んでたの？」

「家」

「あなたの親って寛大なのね」

桜子の家は由緒正しき医者の家庭で、兄はもちろん、娘である桜子も当然のごとく医者を目指していた。それ故、躾にも厳しく、本来なら夜中に出歩くことも許されない筈だ。

「大丈夫なの？　家」

「今日は友達の家に泊まるって言ってるから平気」

陽は絶句した。
「困ってる、困ってる」
桜子はＳっ気全開の瞳で陽を見上げた。
「選択肢は三つです。これからファミレスに行って朝まで喋り倒すか、カラオケに行ってひたすら歌いまくるか、ホテルに行ってエッチした後、仲良く眠るか……」
「カラオケで」
「ホテルって言いなさいよ、馬鹿」
桜子は陽の頭をばしっと叩いた。
「俺、酔ったらできない」
桜子はもう一発叩き、「じゃあ行こ」と、立ち上がった。
「でも、制服……」
「あ、さすがにやばいかな」
桜子は自分の制服の上着を引っ張った。
「貸すから」
陽はため息をついて自分も立ち上がった。

「先輩って案外向こうみずだよね。俺が都合悪かったらどうするつもりだったの？」

「そのときはそのときよ」

「危なっかしいなぁ」

陽は再び桜子の手を引いて歩き出した。

自宅の明かりは全て消えていた。陽は鍵を開け、そっと桜子を中に招き入れる。

「おじゃましまー……す」

桜子は呟くように言い、陽はリビングとは反対側の座敷に桜子を通した。

「どうせ着替えるんだし、シャワー浴びたら？」

「いいの？」

桜子は嬉しそうに言う。

「ちょっと待ってて」

陽は足音を忍ばせて二階に上がっていく。

すると目の前のドアが開き、中から藍が顔を覗かせた。

「どうしたの？」

陽は面食らった。まさか起きているとは思わなかったのだ。

「あー……、俺ちょっと出掛けてくるから」

「うん。先輩と？」

「何で知ってるの？」

「窓から見えたから」

陽はぎょっとする。

「見てたの？」

「ちらっと見えただけよ」

藍は笑い、「じゃあ、いってらっしゃい」と言って、ドアを閉めようとした。

「あ、藍」

陽は慌てて呼びとめた。

「何か適当に服貸してくんない？」

陽と桜子はカラオケボックスに入ると、ドリンクだけ注文して喋り始めた。

「かわいいわね。この服」

桜子は藍に借りたワンピースをつまんだ。

「先輩、あんまりそういう服着ないよね」

「似合わないもの」

藍と桜子は身長差があるため、藍は気を利かせてふわりとした丈の長いワンピースを貸してくれたようだ。

「そんなことないよ。似合ってる」

「そういうこと、さらっと言うんだから」

桜子は軽く睨んだが、まんざらでもなさそうだ。

「ごめんね、強引に誘って」

桜子は急に殊勝になって頭を下げた。
「自覚があるだけまだ救いがあるよ」
陽が言い、二人は顔を見合わせて笑った。
「眠れそうになかったからちょうどよかった」
陽はウーロン茶を一口飲んだ。
「また眠れなくなったの？」
「またっていうか、時々あるんだ」
隣の部屋の大音量がこちらまで響いていた。あまりうまくはない男の歌声が聞こえてくる。
「陽、繊細だもんね」
繊細かどうかはともかく、昔から考え事をし過ぎると眠れなくなるたちだった。そうなると、今度は肩凝りや頭痛に悩まされる。
「悩み事があるなら聞くよ」
桜子はお姉さんの顔になる。
「ないよ」
「嘘、あるでしょ。恋の悩みが」

桜子は何だか楽しそうである。

「俺の恋愛は上手くいってる筈だけど？」

陽は挑戦的に桜子を見た。

「秘めた恋の方は……？」

桜子はからかうような表情になっている。

「勘弁してよ」

陽は耐え切れずに目を逸らし、桜子は笑い出した。

「別に私に遠慮しなくていいのよ。最初からそういう約束じゃない。あなたはお姉さんへの不毛な恋を忘れるため。私は心の支えを手に入れるため」

「そういう先輩こそ、今日は俺の支えが欲しくてきたんじゃないの」

陽は形勢を逆転しようと詰め寄った。

「ほら、何があったか言ってみ」

陽に真っ直ぐ見つめられ、桜子の顔から笑顔が消えた。

黙って鞄から紙を一枚取り出す。

それは今日予備校で返ってきた、模試の結果だった。

「Ｄ判定……」

「私、もう駄目かも。どんなに頑張っても成績伸びないし」

「まだ半年あるじゃん」

「これから部活引退した奴らが追い上げてくるのよ。勝てるわけないじゃない」

「思い詰め過ぎだよ」

陽は桜子の肩を優しく叩いた。

「大体、先輩は気分転換が下手なんだって。そんなんじゃ、できるものもできなくなるよ。……よし、歌おう」

陽は桜子にマイクを渡した。

「何でもいいから歌いなよ」

桜子はぽかんとして陽を見ている。

「先輩が入れないなら俺が歌うよ。ＥＸＩＬＥでいい？」

陽はさっさと機械を操作して、曲を入力する。

すぐにイントロが流れ出し、陽がマイク片手に立ち上がったので、桜子は爆笑した。

ブラコンとシスコン

――何てタイミングが悪いんだろう。

偶然陽と桜子が抱き合っているところを見てしまった藍は、ショックを受けている自分に嫌悪していた。

陽が女の子と付き合うのはこれが初めてじゃない。ということは、抱き合うよりもっと凄いことをしている筈なのに、そのことを考えるだけで嫌でたまらなくなる。

『身内のそういうのって、気持ち悪いもんよ』

友人の春奈がそう言って慰めてくれた。

確かにその通りなのだと思う。

その上、以前男性に嫌がらせを受けたことがある藍は、そういう意味でも性的なことを苦手としていた。

「ハァ……もやもやする」

藍は寝返りを打った。

こういうとき、陽なら煙草を吸ったりするのだろうが、藍はそういう手段を持たない。

そういえば、中学生のときに陽が煙草を吸っているのを知ったときもかなりの衝撃を受けた。陽は学校でも家でも優等生で通っていた。

それまで藍は、煙草というのは不良が吸うものだと思っていたのだ。
部屋の入口で立ち尽くしている藍に気付き、陽は驚いたようだったが、手に持った煙草を隠すこともなく、「ごめん、煙たいよね」と言って灰皿代わりにしていた空き缶で火を消した。その仕草があまりに手慣れていて、藍はとても不安になった。
——私は陽のこと、何も分かっていないのかもしれない。
この五年で、すっかり陽の理解者になったつもりでいた。けれども陽の心はそれ以上に深く、藍の手の届かないところにあるような気がする。
——いつか遠くに行っちゃうんじゃないだろうか？
藍はそこまで考え、身震いして布団を頭から被った。

「もう食べないの？」
「うん」
藍は自前の弁当にほとんど手を付けず、蓋を閉めてしまった。

「体調悪いの？」

「ううん」

「じゃあ、悩み事だね〜？」

一緒にお昼を食べていた春奈が椅子を引いて近寄ってきた。

「また陽くんのこと？」

「私って、そんなに陽のことしか考えてないように見えるのかな」

「そうじゃん、実際」

小学校から仲の良い春奈は、陽が藍の家に来たときから知っている。

「今度は何？　恋でもした？」

「どうしてすぐ恋愛に結び付けようとするかなぁ〜」

藍は心底嫌そうな顔をした。

藍は女の子にしては珍しく、“恋バナ”が苦手だった。昔から女子の間で誰が誰を好きなどという話になると、何となく居心地悪そうにしていた。もちろん藍がそれを顔に出す筈もなく、春奈が長年の付き合いで分かるだけだが。

「いいじゃない、禁断の恋。萌え〜」

「ネタにして楽しんでるだけでしょ」

「まぁ、そうとも言う」

春奈は笑い、藍はため息をついた。

「で、どうなの？　陽くんのことなんでしょ？」

「まぁ……」

「AVでも見てたとか？」

藍はギロリと春奈を睨んだ。

「ごめんって。ほんと潔癖なんだからァ」

春奈の言葉に藍は肩を落とした。

「私って、子供過ぎるよね。こんなんじゃ、陽も頼りにしてくれるわけがない」

「頼りにされたいの？」

「お姉ちゃんなわけだし」

「お姉ちゃんっていっても、同い年じゃない。てかはっきり言って、あっちの方が精神年齢が上……あ。陽くん」

「えっ」

藍は振り返った。

教室の入口で藍の姿を探していた陽は、春奈に手を振られてこちらに気付き、中に入ってきた。

「電子辞書貸して」

「忘れたの？」

「うん。次使わないよな」

陽は藍達の時間割を確認する。

「すぐ返すから」

陽が立ち去ろうとすると、春奈がそれを呼び止めた。

「陽くん聞いて。藍ったらご飯ほとんど食べてないの」

「……また？」

陽は戻ってきて、藍の額に手を当てた。

女子達がちらちらとこちらを見る。

「何かあると、すぐ食欲なくすんだから。貸して」

陽は前の席の椅子をこちらに向けてそれに座ると、藍の弁当を取り、蓋を開けてため息をついた。

「ほとんど食べてないじゃん……」

「ごめんなさい」

藍は頭を下げた。

「箸」

陽が手を差し出す。

「あ、はい」

藍は陽の手に箸を乗せた。

「まったく。食べ物粗末にすんなよな」

陽は箸入れから箸を取ると、一気に弁当をかき込み始めた。

「お茶漬けのＣＭに出れそうな食べっぷりね」

春奈は藍の方を向いて言った。

藍は唖然としてその様子を見ている。

「ごちそうさま」

陽は蓋を閉めると、丁寧に弁当袋にしまった。

「陽、自分のお弁当も食べたんでしょ。大丈夫?」

「こんなの大した量じゃない」

陽は弁当袋を藍に渡し、立ち上がった。
「今日もバイトだから」
「え？　うん」
「一人だからって、飯抜かないよーに」
藍がこくこく頷くと、陽は安心したようにその場を去った。

「凄いね。普通あそこまでできないよ」
春奈は言った。
「人の弁当の食べ残しなんて、たとえきょうだいでも嫌だわ」
「陽はあんまりそういうこと気にしない人だから」
藍は食べ残したことを叱られたのだと思い、反省していた。
「馬鹿ね。愛があるからに決まってんでしょ」
「そんなこと……」

「あのねぇ、あんなかっこいい弟に大事にしてもらって、あんたは羨望の的よ？　あー、私も弟欲しいー。私だけにかしづく従順な弟を足蹴にしたいー」

「どういう願望よ」

藍は呆れて頬杖をついた。

帰り道

その日の帰り、藍が靴箱でローファーを取り出していると、鞄の中の携帯が震えた。

『今どこ？』

陽からのメールだった。

『靴箱』

藍は返信する。

『待ってて。一緒に帰ろう』

珍しいなと思いながらも、靴箱のスノコの上に座って待っていると、まもなく陽が階段の方から走ってきた。

「どうしたの？　先輩は？」

藍は立ち上がって尋ねた。

「先輩は今日用事があって、一緒に帰れないから」

陽は息を切らしながらそう答えた。猛ダッシュで来たらしい。

「それで私と？　友達と帰りなよ」

藍は笑った。

「それが、先輩と帰るつもりで待ってたもんだから、みんな帰っちゃって。藍は？　居残り？」

「図書室に寄ってたの」

「ふうん。相変わらず読書家だな」

陽が靴を履き替えると、二人は昇降口を出て歩き出した。

「バイト間に合うの？」

「間に合うよ」

陽は腕時計を見た。入学祝いに父が買ってくれた、学生にしては高価なアナログ時計である。

「久しぶりじゃない？　一緒に帰るの」

藍は言った。

「そう？」

「普通、年の近い異性のきょうだいって、一緒に帰ったりしないよね」

「そうだっけ」

「そうだよ。倉本さん達もそう言ってた」

「あの双子の？」

「うん。さやかちゃんと敦史君」

二人と同学年の倉本さやかと敦史は二卵性双生児だ。藍は去年さやかと同じクラスだったため、今でも交流がある。

「できるだけ離れたいんだって。いつも一緒だったから」

「いつも一緒だったからだろ？　俺達は違うじゃん」

出会った時は既に思春期に突入していた二人は、そんなに一緒に遊んだりしていない。

「いいんだよ。きょうだいの形なんて、人それぞれなんだから」

風が涼しく、過ごしやすい気温だった。じきに半袖では寒くなるに違いない。

「藍って、外で一緒にいるの嫌がるよね。俺、うざい？」

「うざいわけないじゃない」

藍は笑った。

「ただ、ちょっと周りの目が気になるっていうか。陽の彼女とかも、私達がベタベタしてたら良い気はしないだろうし」

「先輩はあんまりそういうこと気にしないよ。てか、そんなにベタベタしてる？」

陽が藍に構い過ぎるためにそう思われてしまうことがあるのは事実だった。藍は中学の頃、陽を好きだった子に、「陽くんを独り占めしないで」と言われたことがある。

「タラシだからなぁ……」

藍は呟くように言った。

「誰が？」

「こっちの話」

二人は駅に着くと、定期券を通して改札口を抜けた。コンコースには様々な制服を着た高校生が溢れている。この辺りには高校がたくさんあるのだった。

「ねぇ、二人の時も先輩って呼んでるの？」

藍は前々から気になっていたことを訊いた。

「ん？　まぁ……」

「名前で呼んであげればいいのに」

「だって先輩の名前、長くて呼びにくいんだもん」

桜子という名前は一見雅やかだが、字余りな感は否めない。本人もそう言って嫌っている。

「さくらって呼べば？」

「何か今更恥ずかし～」

「駄目よ。絶対先輩も名前で呼んでほしい筈よ」

五分後、二人が乗る電車が駅にやって来た。三両編成で、二人が住んでいる土地があまり都会でないことを物語っている。

プシューと扉が開き、二人はその他の待っていた人達と一緒に電車に乗り込んだ。この駅が終点で、ターンして引き返すため、全員が楽に座ることができる。

「ところで、今度の土曜日空いてる？」

陽は鞄を足元に置き、英語の速読テキストを出しながら尋ねた。

「空いてるけど。何で？」

「父さんが、新しくできた水族館に行こうって言ってるんだけど」

「ほんと？　私、行ってみたかったんだァ」

陽は微笑み、「じゃあ、父さんにそう言っといて」と言った。

藍は生き物全般が大好きで、昔はイルカの調教師になりたいと言っていたくらいである。

まもなく電車が動き出した。

藍はさりげなく陽の手元を覗き込む。

「それってさ、学校で使ってる教材とは違うよね」

二人の学校では、一年生のときから学校指定の単語帳と熟語帳を使っているが、二年生になってそれに速読帳が加わった。けれども今陽が持っている物は、みんなが使っている物とは違う。

「先生に、『単語力と読解力を一気につける便利な教材ありませんか』って訊いたら、進めてくれた。いつも使ってる速読帳と同じシリーズだよ」

確かに表紙は似ている。けれども、内容は比べものにならないほど難しく、単語も知らないものばかりだった。

「いつも使ってる速読帳じゃ駄目なの？」

「あれももちろんいいんだけど、何回もやったから英文の訳を覚えちゃって、速読の練習にならないんだ」

藍は驚いた。まだ二年生になって半年である。けれども、陽のやっていることは受験生の勉強なのだ。昔から何でも前倒しで進めていく陽だが、改めてその凄さに気付かされた藍だった。どちらかというとのんびりな自分とは正反対である。

「ね。どこの大学狙ってるの？」

陽は地元の国立大学の名前を言った。

藍はほっと胸を撫で下ろし、そんな自分に戸惑いをおぼえた。

――いつかは離れ離れにならなきゃならないのにな。

藍と父と陽

その日の夜、藍は父の晩酌に付き合っていた。最近は陽も父も帰りが遅いため、夕食は各自取るようになっている。

修平は夕食の肉じゃがをつまみに焼酎を飲んでご機嫌だ。藍にも飲めと進めるが、「明日も学校だから」と遠慮する。藍は陽と違い、酒があまり強くない。

「しかし藍もすっかり大人だな。こうしてお酌をしてもらってると、キャバレーに行っている気分になる」

キャバレーという言葉に時代を感じるが、要するに飲み屋の姉ちゃんみたいだと言いたいらしい。

「色気が出てきた？」

「そこはかとなくな」

修平が言うと、藍は照れたように修平を叩いた。

「料理は上手いし、もういつでも嫁に行けるぞ」

「まだ早いよ」

藍は笑う。

「お前は陽と違って奥手だからなぁ」

バレンタインもクリスマスも、大抵家で過ごす藍だった。

「陽を基準にしちゃ駄目よ。陽は何でも早いんだから」

「はは、あいつは早く大人になりたがってるからな」

修平がグラスを渡すと、藍は側に置いているポットでお湯割りを作った。

「好きな男はいないのか？」

藍は危うくグラスを手から落としそうになった。

「普通、娘にそういうことは訊かないものよ」

お湯割りを渡すと、修平はそれを旨そうにちびちびと飲んだ。

「別にいいだろ。俺は相手に嫉妬したりはしないよ」

少しは妬いてほしいな、と藍は笑ったが、

「残念ながらいないの。私って、ほんとに奥手みたい」

と答えた。

実は藍は、陽以外の男の子が苦手だったりするのだが、そのことは父には言わない。

「いい奴がいたら連れてこいよ。歓迎するから」

「これでな」と、父は酒瓶を持ち上げた。「お酒は駄目よ」と、藍がたしなめる。

「あいつも早く一番大事なものに気付くことができたらな。急ぎ過ぎて自分の気持ちが見えなくなってるんだろう」

藍は父の方を見た。言っている意味がよく分からなかったのだ。

修平はそれ以上何も言わず、相変わらずちびちびやりながら、塩辛やらモロキュウやらを箸でつついた。

「あ。そうだお父さん、土曜日、水族館に連れてってくれるんだって？」

藍はそれを聞いた時からずっとうきうきしていた。水族館ももちろん嬉しいが、家族で出掛けること自体久しぶりなのだ。

「少し遠いし、帰りに温泉入って、旨い物食って帰ろうと思ってるんだけど」

「やったぁ！　温泉！」

藍は温泉も大好きだった。近くにも温泉が湧いている場所があるので、時々友達と入りに行ったりする。

「けどあれだな。陽の奴、水族館に行きたいだなんて。そんなのデートで行けばいいだろうに。なぁ？」

「え？　お父さんが言い出したんじゃないの？」

藍は修平の方を見た。

「あいつが行きたいって言ったんだぞ」

陽はどこで手に入れたのか、わざわざパンフレットまで持ってきた。

“イルカと交流できるらしいよ。餌上げたり、触ったりできるんだって”

陽ってそんなにイルカ好きだったか……？　そう思いながら藍の方を見た修平は、すぐに合点がいき、苦笑した。

「しょうがないなぁ。あいつは……」

十時半頃、藍が一人でテレビを見ていると、陽がバイト先から帰宅した。

「ご飯食べる？」

「うん」

陽は冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップに注いだ。

「今日は肉じゃがだよ〜。お肉たっぷりだよ〜」

台所にやってきて、鍋を火にかけながら藍が言う。
「ジャガイモじゃなくて？」
「ジャガイモもだけど、お肉も。だって陽、育ち盛りだから〜」
「俺の身長はもうそんなに伸びないと思うけど」
陽は鍋の蓋を取って、中を見た。
「藍は食ったんだろうな？」
「食べたよ」
「の割に、減ってねーけど」
「いっぱい作ったもん」
「どれ」
陽は藍のお腹を触った。
「ちょっ！　お腹はやめてよ」
「腹じゃなければいい？」
「どこもダメッ！」
藍は拒絶したものの、至って普通のリアクションだった。

数年前に痴漢にあった直後は、陽が少し触れるだけで泣き出したものだった。当時は拒食気味で、ひどく痩せてしまったものだが、今はあの頃に比べるとだいぶふっくらしている。

「別に細いんだからいいだろ。そういや、藍って体重何キロあんの？」

「さいってい」

「大丈夫。藍以外の女子には訊かないから」

陽は笑いながら箸立てから箸を取り、食卓についた。

食べるまでは軽口を叩いていた陽だが、食べ出した途端、急に無口になった。

時々箸を止め、こめかみの辺りを押さえている。

「頭痛いの？」

食卓の自分の席に座り、文庫本を読んでいた藍は、心配そうに覗き込んだ。

「少し……。動いてるときはそんなに気にならなかったんだけど」

「肩凝りがひどいんじゃない？」

藍は立ち上がり、陽の肩を揉んだ。

「うわっ、すごく凝ってるよ。ガッチガチ」

「やっぱそうかー」

陽は肩を押さえ、首を動かした。

「お風呂上がりに揉んで上げるよ」

「まじで？　助かる〜」

「五分百円で」

「金取んのかよ。しかも何か妥当な値段だよ」

陽は笑い、残りの肉じゃがを口に運んだ。

肩叩きと耳かき

「いいなー。俺もやってほしい」

陽が藍に肩や首をマッサージしてもらっているのを見て、自室からリビングに戻ってきた修平は羨ましそうに言った。

「お父さんは明日ね」

藍は肘で陽の肩をぐりぐり押しながら言う。

「いて～」

「陽、藍の肩叩きは俺の特権だったんだぞ。大体なんだ、若いくせに」

「部活辞めたら、急激に老けちゃって」

「コノヤロウ。今すぐ走ってこい！」

「お父さん、無茶言わないで。陽は疲れてるんだから」

「俺だって疲れてるぅ」

「知ってるよ。いつもありがとう」

藍にいなされながら、それでも修平は陽に絡む。

「陽、知ってるか？　肩叩きの後は耳かきってのがお決まりのコー

スなんだ」

「ああ、父さんいつもやってもらってるよね」

「お前もやってもらえよ」

「はっ！？　何言ってんの？」

「肩叩きをやってもらったからには、耳かきまでやってもらわなくてはならない。藍の膝枕で」

「そんなのできるわけないだろ！」

「これはさだめなのだよ。肩を叩いてもらったのが運のツキ」

「無理だって！」

「てめぇ、俺の娘の膝枕が嫌だってのか」

「ちが、嫌じゃないけど……いや、何言ってんだよ。嫌に決まってるだろ。姉弟だぞ、俺達」

修平はにやりと笑い、「大丈夫。誰も見てないから」と言った。

「そういう問題じゃないから。おかしいから。常識的に」

「常識なんてどうでもいいだろ――。藍も嫌かぁ？」

修平は藍に呼び掛けた。

「え？　私は別にどっちでもいいけど。しようか？　耳かき」

「そこ、嫌がれよ！」

陽は思わず振り向いて突っ込んだ。

「藍ちゃん、ほんとにするのー？」

肩叩きが終わった後、藍は引き出しから耳かきを探し始めた。

修平は絡むだけ絡むと、「後はごゆっくり」と言ってさっさと寝てしまった。修平が見てる前でなら罰ゲームだと思って耐えられるのだが、この状況で膝枕はどうだろう。

「父さんに言われたからって、無理してすることないんだよ？」

「うん。ただ、入眠効果があるから、陽にも効くんじゃないかと思って。お父さん、気持ち良くてすぐ寝ちゃうのよ」

「そうかもしれないけど、色々やばいっしょ」

「何が？」

「何がって……」

修平がしばしば陽にちょっかいを出すのは、藍への気持ちに気付いているからに他ならない。けれども、藍の方は陽に姉弟以上の感情は抱いていない。陽のことを少しでも男だと意識しているのなら、父と同じ扱いをしたりはしない筈だ。

陽は軽くへこみながら、「普通そういうのって、夫婦とか恋人同士がするものであって、姉弟ではしないだろ」と言った。

「そうなの？」

「そうだよ」

「でも親子でもするじゃない。……あ、耳かきあった」

藍は純粋ゆえ、たまに周りとずれているときがある。今も、陽のようなよこしまな気持ちは少しも抱いておらず、純粋に奉仕したくて言っているのだ。

くそー。外で俺が構うと嫌がるくせに、家じゃ結構構ってくるんだよな、藍のやつ。

陽は頭をガリガリと掻いた。

必要ないと言って二階に上がってしまえば済むことなのだが、ちょっとやってもらいたいという気持ちがあった。

陽の中の天使と悪魔が囁く。

“駄目だよ！　そんなの姉弟がすることじゃないよ”

“やってもらえよ。ほんとはしてもらいたいんだろ？　ぐへへへへへ……”

陽は最終的に天使の方を振り払い、たかが耳かきくらいで何だ。別にキスするわけじゃあるまいし――。と、開き直った。

陽は心を無にしていた。藍の太ももの感触とか、そういうことは一切考えないようにする。

気が休まらず、やっぱりやめておけば良かったと後悔していると、藍が耳をほじりながら言った。

「痛かったら右手上げて下さい」

「歯医者さんかよ」と突っ込もうとしたが、左耳をやってもらっているので、右手は体の下だ。

「いや、右手上げれねーし！」

「あ、そうだっけ」

藍がボケをかまし、そのお蔭で少し緊張がほぐれた。

「陽、全然耳くそ付いてないね。つまんなーい」

「耳くそとかゆーな」

藍は慣れているのか絶妙な力加減で、全く痛くなかった。それどころか、

「めちゃめちゃ気持ちいいー……」

「でしょ。眠くなるでしょ」

耳かき自体も気持ち良いが、藍が時々髪を撫でてくれるので、陽にはそれが嬉しかった。

“父さんはいつもこんなことやってもらってるのか。いいなぁ。てか、この先藍と付き合う奴は、堂々とこういうことをやってもらえるってことだな。やばい、相手のこと許せるのか？　俺”

陽が悶々とそんなことを考えているうちに左耳の方は終わったらしく、藍は陽に反対を向くように促した。

反対を向くと藍の体が目の前にあり、陽は動揺したが、目を閉じてそれをやり過ごすことにした。

「陽の髪、少し茶色くて柔らかいよね。お父さんもそうだったらしいから、やっぱり似てるのかな」

藍は陽の髪を触りながら言った。修平の髪は白髪の方が多くてよく分からないのだが、昔は陽と似た髪質だったらしい。

「私は真っ黒で硬い髪だからなぁ。羨ましい」

「藍の髪、きれいじゃん」

「えー。茶色い方が可愛いよォ」

髪を撫でる感触が良い脳波を出しているのか、徐々に体の力が抜け、陽は眠くなってきた。

母がまだ生きていた頃、たまにこうしてくれていたことを思い出す。

「ねぇ、陽。土曜日のことなんだけど、出発は八時くらいでいいかな。ねぇ？」

返事がないので覗き込むと、陽は寝息を立てていた。

「……やった！」

藍は小さくガッツポーズをし、陽に囁き掛けた。

「ね、言った通りでしょ」

子供をあやすように、優しく背中を叩く。

「かーわいい……」

陽と女

『陽、すごいわね。また全部九十点台じゃない』

母はテストの答案用紙を眺めながら言った。

『なかなか百点が取れないんだ』

陽は足の爪を切りながら、悔しげに言う。

毎回じっくり見直して提出するのだが、それでも所々間違えているのだった。

『いいじゃない。母さん、百点なんて見たことないわよ。そんなの存在しないのかと思ってたわ』

母はあっけらかんと笑い、答案用紙を置いて陽の傍らにしゃがみ込んだ。

『ね、今度の日曜日お休み取れたから、どっか行こうか』

『えっ』

陽は母の方を向いた。

その表情は嬉しさを隠せていない。

『どこがいい？　遊園地？』

『いいの！？　でも、お金が……』
不安がる陽の頭を母は荒っぽく撫でた。
『こういうときのために普段我慢してるんでしょ。いつも頑張ってるから、ご褒美よ』
陽の目が輝く。
『朝から行って、乗り物全部乗りましょ』
『やったぁ！！』
陽は今度こそ喜んだ。

『母さん、こんな所で寝たら風邪引くよ』
陽は椅子に座り、台所に突っ伏して寝ている母の肩を揺すった。
『あら、陽。起きてたの？』
母は寝ぼけ眼でこちらを見る。
『ちゃんと寝なきゃ駄目じゃない。明日一番になれないわよ』
明日は小学校の運動会だった。

『母さんこそ何やってんだよ。弁当は買ってきたやつでいいって言ったろ?』

母は夜中に仕事から帰ってきて、これから弁当を作ろうとしていたのだ。

『駄目よ。母さんの一年に一度の楽しみなんだから』

仕事で授業参観にもなかなか出席できず、唯一運動会だけが陽の学校での晴れ姿を見られるときなのだった。

『明日は陽の好きな物いっぱい詰めて、応援に行くからね』

母は立ち上がって弁当の支度を始めた。

『河島!』

昼休み、陽が運動場でサッカーをしていると、担任の教師が呼びに来た。

『お母さんが事故に遭われた。今すぐ帰る準備をしなさい』

陽は目を開けた。視界はグレー一色で、それが何なのか思い出すのと起き上がるのは同時だった。グレーは藍の着ているTシャツの色で、今までずっと彼女の膝の上で寝ていたのだ。

壁に掛かっている時計を見て愕然とする。午前二時二十分――。あれから三時間以上が経っている。

「藍、起きろ。大丈夫か」

陽は藍の肩を叩いた。藍は体をよじり、横にあるテーブルの上に頭と腕を載せて眠っていた。

うーんと言って藍は起き上がったが、陽を見ると「おはよう」と呑気に言った。

「バカ！　何で起こさないんだよ」

陽は自己嫌悪に陥っていた。熟睡していた自分の頭はかなり重かった筈である。

「だって、よく寝てたから」

藍はにこにこと答える。

「そんなの気にせず、叩き起こせよ」

言葉の乱暴さとは裏腹に、陽はなぜか泣きそうになっていた。

両手を引っ張って助け起こそうとしたが、藍は足に感覚がないために立ち上がれない。

「へへへ……」

照れ隠しで笑う藍を、陽は抱え上げた。

「ちょっと、何するの！」

「ごめんな。俺のせいで」

「下ろして！」

陽は藍の足をぎゅっと握った。

「ぅ、あ、あ、ぁ」

時間差で激しい痺れがやってきて、藍は陽の肩にしがみついた。

「痛いだろ？」

陽はよしよしと藍の背中を叩きながら、リビングを出て、階段を登った。

下ろしてもらおうともがくと陽が足を摘むので、藍はその度に声を上げて陽にしがみつく。

「あんまエロい声出すなよ。父さんに不審に思われるだろ」

「えっ、エロ……!?」

藍は咄嗟に陽から手を離し、落ちそうになって陽に抱き締められた。

「危ないって」

陽は愛しさが募り、思わず腕に力を込めた。

「いやぁ、びりびりする〜」

痺れに襲われている藍は、そんな陽の異変には気付いていないようだった。

藍をベッドに下ろすと、陽は「おやすみ」と言って、自室に戻った。

机の上を見ると、携帯が点滅していた。桜子から着信が入っていたようだ。

ほんの数分前だったので、今ならまだ掛けても大丈夫だろうと、発信ボタンを押す。

『もしもし?』

桜子はコール二回で電話に出た。

「勉強してたの？」

『そ。あなたは例の不眠？』

「いや、今まで寝てた」

陽は答えながら、なぜ桜子に電話を掛けてしまったのだろうと思った。

そもそも二人は互いの相談相手だった。二人の教室は非常階段を挟んでちょうど上下に位置しており、時々会って自分の悩みを聞いてもらっていたのだ。

桜子は家に居場所がないこと。

陽は好きになってはいけない人を好きになってしまったこと。

それぞれの悩みは今まで他人に話すことができなかったのだが、その重さは釣り合いが取れているような気がして、あまり抵抗なく話すことができた。

『ね。今度の土曜日、暇？』

「ごめん、土曜はちょっと」

その日は家族との先約がある。

『じゃあ、日曜日は？　両親があなたに会わせろってうるさいの。

うちに来てくれない？』

「ご両親に！？」

『お願い。お見合いさせられそうなの。彼氏がいるってことを示すだけでいいから』

今まで桜子の家に行ったことすらなかった陽は、急展開に動揺した。

「それって俺でいいわけ？」

『何言ってるのよ、他にいないじゃない。とにかく来て！　お願い』

桜子は強引に話を決めてしまった。

アクアリウム

二頭のイルカが高く跳んだ瞬間、場内に歓声が湧き上がった。

土曜日、藍と陽と修平の三人は、県内に新しくできた水族館に来ていた。

「しぶき、すげーな」

修平は顔に付いた水滴を拭いながら呟いた。前の方の席を陣取ったために、水しぶきをもろに浴びてしまうのだった。陽が隣を見ると、藍は濡れることなどお構いなしに、手を叩いて喜んでいる。

「はーい。よくできました。それでは、もっと高くしてみましょう。挑戦するのは銀河くんです。できるかなー」

司会のお姉さんが溌剌と言った。

天井から吊り下げられていたバルーンのような物が、更に高く上がる。イルカとはいえ、さすがに届かないだろうという高さだ。

「頑張れ」

藍は祈るように言った。できないのならショーの一部に組み込まれる筈がないのだが、その純粋さこそが彼女の魅力だ。

そして銀河は跳んだ。水面からの高さは四、五メートルくらいあっただろうか。体を反らせるようにして勢いよくバルーンにタッチし、バシャーンと水の中に落ちた。

これまでで最大の歓声が上がり、そしてこれまでで最多の水しぶきを浴びる。

「きゃあ」

藍は悲鳴を上げながらも嬉しそうだった。

「使う？」

陽がハンドタオルを差し出すと、藍はそれを受け取って腕をふきながら、「私達も泳ぎたいね」

と言った。九月とはいえ、まだ残暑が厳しかった。

「知ってる？　あの子達って、野生のイルカなんだよ」

「それは人間が育てたわけじゃないってこと？」

「そう。イルカって賢いから、野生の子達でも充分に芸を教えられるんだって」

おそらくテレビの受け売りだろう。藍は動物系の番組は欠かさずチェックしている。

「かわいいな。イルカ欲しいな」

藍の言葉に陽は、「この前は馬が欲しいって言ってたじゃん」と笑った。

以前テレビで競馬の特集があったときに、彼女はそう言っていた。どちらも家庭で飼うのは不可能であるが、要するに藍は動物なら何でもいいのだった。

「犬もいいな」

陽は言った。

「猫もいいね」

藍も言う。

「ハムスターでもいいな」

「イグアナでもいい」

「イグアナ！？」

陽は驚いて藍の方を見た。

今回、密かに陽がメインイベントにしていたイルカとの交流は、人数に限りがあってできなかった。しようと思えばできたのだが、藍が遠慮して子供達に譲ってしまったのだ。それでも藍は、とても満足そうだった。代わりに“タコ触り放題”のコーナーで、大きな

タコを触り、後はじっくり館内を回った。

水族館を満喫すると、次は温泉へと向かった。事前に修平が調べていた、この辺りで有名な温泉施設で、様々な種類の風呂があり、大浴場には大きな水槽があるとのことだった。しかしそれは男湯にしか付いておらず、藍は悔しがっていた。

「女湯に付けてくれれば良かったのに、どうして男湯なの」

散々水族館で魚を見たくせにと陽は思った。

「藍もこっちに来ればいいじゃん」

「そうそう。二人じゃ寂しいし」

陽と修平はそう言ってからかったが、藍は「結構です」と答え、悔しそうに女湯の暖簾をくぐった。

服を脱いで入口のガラス戸を開けた瞬間、陽は感嘆の声を上げた。

「おおーっ。ジャングル！」

中は天井が高く、木々が鬱蒼と茂っていた。奥行きもあり、ちょっとした植物園のようだ。

「すげえ」

子供のように興奮して周りを見回している陽を見て修平は笑い、浴槽へと向かった。

「何だこれは。寝風呂？」

タイル張りの小さな風呂の端の方に緩やかな斜面があって、そこに寝られるようになっているようだ。

「どれ」

修平は寝そべってみた。あまり寝心地は良くないが、とりあえず眠っても溺れることはないような造りになっていた。

「おおー」

陽も試して見たが、早々に立ち上がって二番目の風呂を指差した。

「次行こ、次」

「落ち着きねぇなぁ」

修平は苦笑して起き上がった。

ワイン風呂や花風呂、どろどろに濁った風呂や五右衛門風呂、果ては滑り台まであって、まるでアトラクションのようだった。

最後の風呂は名物である水槽付きの大浴場で、部屋一帯に長い水槽が取り付けられており、中をウミガメやエイが悠々と泳いでいた。室内は薄暗く、幻想的な雰囲気を醸し出していて、人間も水に入っていることを除けば、水族館と大差なかった。

「女湯の方に付ければ良かったのに」

陽は藍と同じことを言った。

「どうやら週ごとに男湯と女湯をトレードするらしいぞ。運が悪かったんだな」

修平は言った。

人はそれなりに多かったが、浴場自体が広いために、話していても気にならないくらいの距離は開いている。

向こうでばた足をしている子供がいて、陽は思わず目を細めた。

二人は少しの間黙っていたが、修平が頭に載せたタオルを置き直しながら、ポツリと尋ねた。

「いつまで藍に本当のことを黙ってるつもりなんだ？」

岩を背にして並んで座っていた陽は、水槽の方を見つめたまま、「一生」と答えた。

「それだと結婚はできないぞ」

「藍の気持ちも聞いてないのに、結婚もくそもないだろ」

陽は笑った。

「あいつはおそらく恋をしたことがない。それはお前がいるからじゃないかと俺は思ってる。姉弟じゃないことが分かったら、少しは変わるかもしれないぞ」

「変わらなくていいよ。このままの方がいい。父さんとも血が繋がってないって知ったら、傷付く」

陽はパシャリと水を鳴らした。

「とにかく絶対に言わないでよ。もし言ったら、たとえ父さんでも許さないからな」

陽は釘を刺して立ち上がった。

「そろそろ出ようよ。たくさん入ったから、のぼせた」

二人の出会い

　今まで何人もの女の子と付き合ってきたが、藍への気持ちを払拭することはできなかった。それどころか想いは募るばかりで、このまま隠し通せるのか不安ですらあった。

　桜子と知り合ったのは他の女の子を好きになるのを諦めかけていた頃で、その日陽は、学校のお気に入りスポットである非常階段で煙草を吸っていた。もちろん見つかれば停学であるが、この場所は学校の敷地内の一番端にあり、今まで誰も付近を通らなかったのだ。

　踊場のコンクリートにもたれて煙を吐いていると、上から足音が聞こえてきた。慌てて火を消し、携帯灰皿に吸い殻をしまう。

「びっくりした。まさか人がいるなんて思わなかったから」

下りてきたのは、すらりと背が高く、髪の長い優等生風の女子生徒だった。

「二年の子よね。ここで何してるの？」

「別に……。ぼんやりしてました」

相手の言葉から三年生だと分かった。女子生徒がこちらに近付いてきたので、陽は身構えた。

「あなた、辻田陽君でしょ。主席入学の」

女子生徒は言った。

「僕のこと知ってるんですか？」

「私生徒会だから、入学式出てたのよね。壇上で挨拶してたでしょ」

女子生徒は目の前にしゃがみ込み、笑みを浮かべた。

「いい度胸ね。見つかったらやばいんじゃない？」

やはりばれていたらしい。陽は女子生徒を冷静に見つめた。

「教師に言いつけますか？」

「そうね。どうしようかしら」

女子生徒は楽しそうに言い、隣に座った。

「学年一位が喫煙なんて、スキャンダラスよね。面白いわ」

陽は相手の真意をはかりかねて黙っていた。もし停学処分になれば、修平は笑いとばし、藍は怒るだろう。

「私にも一本ちょうだい」

女子生徒は手を差し出した。

「へ……？」

陽は思わず間抜けな声を出してしまう。

「バラされるよりましでしょ。さぁ、早く」

陽は言われるままに煙草とライターを女子生徒に渡した。

女子生徒は指の間に煙草を挟み、ライターで火を点けて思い切り煙を吸い込み――むせた。

「大丈夫ですか！？」

女子生徒は涙目になり、げほげほ言いながら陽に火の点いた煙草を返した。

陽は戸惑いながらそれを受け取る。

「よく吸うわね。こんなもん」

「あの……吸ったことあるんですよね？」

「ないわよ」

陽は唖然とする。

女子生徒は「あー苦しかった」と言い、こちらを向いて、「吸えば？　残り」と陽の持っている煙草を指差した。

「え、でも……」

「バラさないから」

「はい……」

陽は煙草をくわえた。

「間接キス」

「えっ！？」

「なんて言うと思った？」

「私、三年一組、藤堂桜子。よろしく」

陽は怪訝な顔をして女子生徒を見た。

「はぁ」

「あなたは？」

「……知ってましたよね？」

「二年一組、辻田陽君。私あなたに興味が湧いたわ。アドレス交換しよう」

「嫌ですよ」

「バラすわよ」

「自分も吸ったくせに」

「あんなの社交辞令よ」

「どんな社交辞令スか……」
陽は渋々ポケットから携帯を取り出した。
「ここにはよく来るの？」
「まぁ……」
「友達いないの？」
「そんなふうに見えます？」
「見えない」
「そうですか」
陽と桜子は赤外線でアドレスを交換した。
「彼女はいるの？」
「グイグイ来ますね」
「もてそうだから」
「いませんよ」
桜子からのアドレスを受信した後、陽は携帯をポケットにしまい、立ち上がった。
「じゃ」

「もう行くの？　まだ昼休みあるじゃない」
「姉が熱出して保健室で寝てるんです。顔見に行こうと思って」
「お姉さんいるの？」
「はい」
「辻田さんなんて、三年生にいたかしら」
「姉も二年なんで」
「ああ、双子？」
「いえ」
「もしかして、留年とか？」
「いえ」
陽は笑う。
「異母姉弟ってやつです」

桜子の母

「豪邸だね……」

「ただの二世帯住宅よ」

日曜日、陽は桜子に連れられて彼女の家までやって来た。

門から玄関までが遠く、更に玄関から部屋までが遠い。玄関には靴が一足も置かれておらず、全ては馬鹿でかい靴箱に収納されているらしい。陽の自宅の玄関は、靴が入り切れずに散乱しているが。

廊下はワックスがきちんとかけられていてピカピカだった。一体誰が掃除をしているのだろうと、思わず主婦のようなことを考えてしまう。

「どうぞ」

桜子はリビングのドアを開けた。

広い部屋、大きなテレビ、オシャレな家具類……。何もかもが豪華だった。陽は無意識に自分が生まれ育った古いアパートと比較してしまう。

「いらっしゃい。どうぞお掛けになって」

四十代くらいの身綺麗な女性がキッチンから出てきてにこやかに言った。ウェーブのかかった長い髪にフレアスカート。おそらく、桜子の母親だろう。陽は自分の母が家でこんなに綺麗にしているのを

見たことがない。

「紅茶とコーヒーとジュース、どれがいい？」

母親がキッチンから尋ねた。

「私、紅茶。アールグレイの方ね。陽は？」

「じゃ、僕も同じ物を……」

ソファーに座った陽は、さり気なく部屋中を見渡した。目の前のガラス戸の向こうは、外ではなく中庭だ。

「ケーキは好きな物を選んでちょうだい」

母親はショートケーキがたくさん並んだ箱を持ってきて言った。

「どれがいい？」

桜子に尋ねられ、陽は少し迷った後、チーズケーキを指差す。

「私、ガトーショコラにしよっと。お母さんは？」

「ミルフィーユをいただくわ」

話し方の美しい人だと陽は思った。ミルフィーユという物が、この上なく高級な食べ物に思える。

桜子は三つのケーキを母親が持ってきていた小皿に取り分けた。

「今日、お父さん、お仕事が入ったみたい」

母親は桜子に言った。

「え！？　それじゃ、意味ないじゃない」

「私が一人でお相手をさせてもらって、後でお父さんに伝えとくわ」

陽は背筋が伸びる思いだった。

つまり、母親一人が陽の品定めをし、後でその印象を父親に伝えるということだろう。

実のところ、二人は疑似カップルのようなもので、今日の目的は桜子のお見合いをやめさせることなのだから、そんなに構える必要はない。けれども、結果として親を納得させなければならないのは同じなので、気は抜けないのだった。

母親は三人分の飲み物をそれぞれの目の前に置くと、二人の向かい側に座った。

「どうぞ、召し上がって」

陽を促し、自分もコーヒーに角砂糖を入れる。

「今日は遠いところをわざわざごめんなさいね」

母親はコーヒーを混ぜ、スプーンを置いてそう言った。

「桜子がお付き合いしている人がどんな人なのか、お会いしてみた

かったの」
母親は陽に微笑みかけた。案外友好的だなと思ったが、話の導入に過ぎないのだろうと、陽は緊張を解かなかった。
「この子、男勝りでしょ？　お嫁に貰ってくれる人がいないんじゃないかって心配してたのよ」
「失礼な。私、女らしいわよね？」
ガトーショコラを頬張りながら桜子が尋ねる。
「うーん。女らしいとこもあれば、男らしいとこもあるよ」
「何それ。きちんとフォローしなさいよ」
「正直が一番だろ」
陽が桜子の方を向いて笑い、桜子が膨れた顔をすると、母親は「仲がいいのね」と言った。
仲が良いのは事実だった。陽にとって、桜子は今まで出会ったどの女子よりも話しやすかった。女性特有の陰湿な面を持ち合わせておらず、さばさばしているためだろう。口がたつので言いくるめられてしまうこともしばしばだが、会話のテンポの良さが心地良かった。そういう意味では藍以上に気のおけない間柄だが、それが恋愛関係とは違うということも理解している。
「あなた達はお付き合いしてどれくらいになるの？」

母親が尋ねた。

「四ヶ月くらいかしら」

桜子は答える。

「そう。まだ付き合い始めて間もないのね。今の時点でまさか結婚までは考えていないでしょう？」

来た、と陽は思った。ここからはあらかじめ桜子と打ち合わせしていた通りに演技する。

「僕は結婚したいと思っています」

「私もよ」

こんなこと言っていいものかと陽はどきどきした。桜子に頼まれていたので問題はないのだが、嘘なのでやはり良心が痛む。後にそうならなくても、若気の至りで済ますから平気よと彼女に言われたが、他に想い人がいる人間が言う台詞ではないな――と、心の中で自嘲する。

「まだ若いでしょう？　もっと色んな人と出会って、色んな経験をしてから決めた方がいいわよ」

母親はやんわりと陽を拒絶した。物腰は柔らかいが、はなから陽を受け入れる気はないらしい。

「お見合いも経験のうちだと言うの？　好きな人がいるのに、他の人を見れるわけがないでしょう？」

桜子の応戦が始まった。

「学生のうちの恋は冷めやすいし、向こう見ずだわ。もっと落ち着いて将来のことを考えられる年齢になって、そのときに初めて結婚を考えるべきよ」

「じゃあ、そのときにお見合いをするわ」

もっともだ、と陽は思った。

「あなたは然るべき人と結婚しなくちゃいけないんだから、今から少しずつお相手を探していても遅くはないの」

「陽は然るべき人じゃないって言うの！？」

予想はしていたので、陽は平静だった。母親は体裁や家柄のことを気にする人だと聞いていたし、陽は幼い頃からこの手の差別には慣れていた。

「学業優秀で、立派な方らしいじゃない。彼にはあなたよりも相応しい人がいます」

「私に相応しいってどんなのよ！？　親の経済力で甘い汁を吸ってのほほんと生きてるような奴？」

「言葉を慎みなさい」

「ひどいこと言ってるのはお母さんの方じゃない！」

桜子はいつもこうやって母親と口論しているのだろうなと陽は思った。そして、この母親を説き伏せることはおそらく不可能だ。なぜなら、彼女は自分が信じる道を生きていて、桜子とは根本的な考え方が違うからだ。

「先輩」

陽は口を開いた。

「とりあえず、お見合いしてみたら？」

桜子は目を見開いて陽の顔を見た。

「どうしてあんなこと言ったの？」

母親との話が終わった後、陽は桜子の部屋に案内された。部屋はセンスよくまとめられており、中でも目を引いたのは、壁に貼られた海をモチーフにした絵だ。

桜子は陽の予想外の言葉にペースを乱され、困惑してしまったのだった。その場は「見合いはしない」で押し切ったのだが、一言文句を言わなければ気が済まない。

「お見合いしてみるのも一つの手だと思って。会ってみて嫌だったら断ればいいじゃん」

陽は棚の上に置かれたトロフィーに見入っている。

「もし気に入ったらどうするの？」

「付き合ってみたら？」

ソフトボールの県大会の準優勝と、合気道の全国大会の三位入賞のものだった。桜子はスポーツ全般が得意なのだ。

「あなたはそれでいいの？」

「先輩さえよければ、俺は構わないよ」

陽の言葉に少なからずショックを受けた桜子は、部屋の真ん中のテ

ーブルの前に座り、「やっぱりダメ？」と尋ねた。

「何が？」

陽は桜子の方を見ると、トロフィーを元の位置に戻して自分もテーブルの前に座った。

「私のことは好きにならない？」

「先輩は魅力的だよ。駄目なのは俺の方だ」

軽い気持ちで付き合い始めた二人だったが、既に桜子は陽のことが好きになってしまっていた。

「姉弟愛を恋愛感情と勘違いしてるだけとは考えられない？」

桜子は陽と藍が血が繋がっていないことを知らない。どこから藍の耳に入るか分からないため、陽が相談相手である桜子にさえそのことを話していないからである。けれども陽自身、血が繋がっていないことを知ったのは二年前だ。実らぬ片思いに苦しむ陽を見かねて修平が真実をばらしたのである。つまり、血が繋がっていようがいまいが陽の気持ちは同じだった。

「俺は藍のことを姉弟だとは思えないんだ」

ちょうど同じ頃、藍は学校の近くのショッピングモールで、去年同じクラスで仲の良い倉本さやかと井口真帆の三人で昼食を取っていた。

「中学の友達と合コンやろうかって言ってるんだけど、二人共来ない？」

さやかは二人を見て言った。

「友達って男子？」

「うん。高校で仲のいい奴、何人か連れてくるって」

さやかは双子の兄がいるためか、男友達がたくさんいる。男子とろくに喋れない藍とは大違いである。

「いいね。私まだ、合コン行ったことないんだ」

真帆が乗ってきた。

「藍も来るでしょ」

藍は担々麺を食べる手を止め、「私、男の子と話すの苦手なんだよね」と、答えた。

「やっぱり？　何となくそうじゃないかって思ってた」

真帆は藍の方を見て言う。

「クラスの男子と話すときも、何かよそよそしかったし」

できるだけ普通にしているつもりだが、緊張して上手く言葉が出て来ず、いつも最小限のことしか言えないのだった。

「何で？　弟とはよく話すじゃん」

「きょうだいは男のうちに入んないよ。さやだってそうでしょ」

「まぁ、そうだね。あんな奴男とは認めない」

さやかはラーメンの上のワンタンを啜った。

「でも弟君って、女癖悪いんでしょ？」

藍は気管に担々麺の汁が入りそうになった。

「大人しそうに見えて、プレイボーイって噂だよね」

中学時代から何人もの女の子と付き合っている陽は、はた目にはとっかえひっかえに見えて、女子の中ではあまり評判が良くない。かっこいいけど、すぐ飽きて捨てられちゃうんじゃないかと思われるらしく、最近では告白する女子もだいぶ減ってしまった。どうやらシスコンぶりもそれに拍車を掛けているらしい。

「陽は早くにお母さんを亡くしてるから、きっと満たされないものがあるんだと思う」

藍も陽が色んな女の子と付き合うのは良く思っていないが、それ以外はほとんど非の打ちどころがないため、それくらいはしょうがな

いと思っている。たまたま今まで本当に好きな女の子が現れなかったただけなのかもしれないし。

「弟想いもいいけど。ね、そろそろ自分の恋愛」

さやかはにっこり笑って言った。

「合コンしよ、合コン」

うーんと藍は渋った。

「何事も経験よ。別に無理して相手を見つけなくても、その場の雰囲気を楽しむだけでいいから」

確かに、そろそろ男の子と普通に接することができるようにならないと。自分がブラコンなのも、陽以外の男の子と交流できないせいかもしれない。

「分かった。行く」

「そうこなくっちゃ」

さやかは早速友人にメールを打った。

合コン1（前書き）

いつもご愛読ありがとうございます。今回、更新速度を上げるために、いつもの半分の量で投稿させていただきました。どうぞご了承下さい。

合コン1

藍は陽がトイレにはいっている間に出掛けようと、そっと廊下を通り、玄関で靴を履いた。

この間モールで買った赤いパンプスだった。赤なんて派手過ぎて買ったことがないのだが、「藍は小柄でかわいいんだから、ピンクとか赤とか女の子らしい色が似合うって」と、二人に勧められ、思い切って買った一足だ。服がどちらかと言うと淡い色なので、浮いていないか鏡でチェックする。

と、トイレのドアが開いて陽が出て来た。

「どっか行くの？」

しまったと思ったが、時既に遅し。案の定、陽はこちらに近付いてきた。

「友達とカラオケに行くの」

藍は咄嗟に下を向いてバックを探るふりをした。

「へぇ……。何か今日かわいいね」

陽は遠慮のない視線を藍に投げかけた。藍は「早く行ってよ～」と思いながら携帯を取り出し、来てもいないメールをチェックする。

「あれ？」

陽の声に藍はどきっとした。

「化粧してる？」

遂にばれてしまった。陽は男にしては珍しく、こういうことに目ざといのだ。「すっぴん禁止ね」という二人の言葉により、藍は初めて化粧に挑戦していた。ファンデーション、マスカラ、グロスなど、全てあの日に揃えた物だ。

「よく見せて」

陽は藍を自分の方に向かせた。

藍は陽と視線を合わせられず、別の方向を見てしまう。

控え目に施された化粧は、藍の素材を引き立てていた。

「変わるもんだな」

陽は感心した。

「さすがに小学生には見えない」

「どういう意味！？」

藍はキッとこちらを見上げた。

睫毛が上がり、黒目がきらきらと光っている。今度は陽が目を反らしたくなった。

「……友達って男？」

「ちがっ！　何言ってんの？」

藍は内心ひやひやした。今日は確かに男子もやって来る。

「彼氏ができたら、俺に一番に報告しろよ」

「お父さんじゃないんだから……」

さすがに藍も呆れた。シスコンぶり、ここに健在だ。

「心配しなくていいよ、彼氏じゃないから。じゃあ、行ってくるね」

「遅くなるなら父さんか俺に連絡しろよ」

「分かった」

藍は玄関のドアを開けて外に出た。

帰りが遅くなるとき、藍は必ず修平か陽に迎えに来てもらうようにしている。修平の帰りが早ければ修平が、陽の帰りが早ければ陽が、二人共遅ければ陽は自分の用（主にバイト）が終わるまでどこかで時間を潰させて迎えに来る。一見過保護だと思われそうだが、藍は中学のときに男に襲われたことがあり、今でも夜道を一人で歩けなかった。

合コン2

真帆とは電車が同じなので途中で落ち合い、二人で集合場所に行った。集合場所には既にさやかと男子が何人かいて、藍は緊張してきた。

「おはよー」

時刻は十一時を回っていたが、さやかは習慣でそう言った。

真帆と藍がおはようと返すと、男子の一人が進み出て「こんにちは」と言い、残りのメンバーもそれに倣った。こちらは「はじめまして」の意だろう。

「さやかの友達だよね？」

キャップを被った一人が近付いてきてそう言った。

「どっちが辻田姉？」

真帆と藍を見比べる。二人は驚いていたが、真帆が「こっち」と藍を指差した。

「おーそうか。俺、さやかの兄の敦史。何となく辻田姉弟には親近感を感じてたんだよな。よろしくね」

藍は戸惑いながら「よろしく」と言った。敦史のことは知っていたが、話すのは初めてだった。陽よりも身長が高く、人の良さそうな笑顔に好印象を覚える。

「てめー。単独プレーしてんじゃねーよ」

先程、率先して挨拶した男子が敦史の首根っこを掴んで引きずり戻した。

「ごめんね。合コンの話したら付いてきちゃって」

さやかはすまなそうに二人に言った。

「まじうざい奴だけど、相手にしてやって」

「ひどいな、さやちゃん。俺ら一心同体じゃーん」

敦史が後ろから情けない声を上げ、二人は顔を見合わせて笑った。

カラオケは持ち込みができる所だったので、大量のお菓子やジュースを買ってから店に入った。敦史が来たことで男子の人数が多くなってしまったため、後からさやか達の中学の友人である可南子という女の子を呼び、計八人での合コンとなった。

さやか、敦史、俊郎、可南子が同じ中学で、残りの男子二人は俊郎の高校の友人だ。合コンというよりも内輪の遊びに部外者が加わったような感じで、とても楽しいカラオケとなった。

敦史と可南子はムードメーカーのようで、敦史はモノマネを繰り返し、可南子は藍達に何かの曲を一緒に歌おうと言っては、振り付けまで披露し、歌い終わった後は「イェー」とハイタッチまでした。同じ中学以外のメンバーは始めは驚くばかりで、ついていけていないようだったが、時間が経つにつれてだんだん皆ハイテンションになっていった。

藍も可南子と“ポニーテールとシュシュ”を歌い、彼女の真似をして少し踊ってみた。男子達が随所で「せーのっ、あっちゃーん」と、呼び掛けを入れて盛り上げてくれ、藍は照れながらも可南子と共に熱唱した。

何時間か経過し、歌う者と話す者に分かれてきた頃、藍の隣に一人の男子が座った。

「藍ちゃんだっけ。俺、まさる。覚えてる？」

一番始めに自己紹介をしたときに、藍は必死に全員の名前を覚えた。そうじゃないと失礼だと思ったからだ。彼は確か……

「手相を診るのが得意なんだよね？」

藍は彼が自己紹介で言ったことを思い出して言った。カラオケのおかげで緊張がほぐれ、ごく自然に言葉が出てくる。

「そうだよ。覚えててくれたんだ？」

まさるは嬉しそうに笑う。

「藍ちゃんの趣味は読書と音楽鑑賞だったよね。俺もちょっとだけ本読むんだ。東野圭吾とか、伊坂幸太郎とか、流行りの作家ばかりだけど」

彼なりに共通点を探して言ってくれているのが分かり、藍も嬉しくなった。先程の敦史といい、今日来ている男子は皆いい人で、藍は自分の"男性恐怖症"は治ったんじゃないかと思うくらい、リラックスしていた。

「私も江國香織さんとか宮部みゆきさんとか流行りの人ばっかりだよ」

藍は笑顔でそう答える。

「音楽は誰が好き？　さっきＡＫＢ歌ってたよね。好きなの？」

二人がいい雰囲気なのをさやかと真帆が遠巻きに見て、にやにやしている。

「ＡＫＢの曲はあんまり知らないけど、優子ちゃんとかたかみなが好き。ああいう元気な女の子って憧れちゃう」

藍はちらりと可南子を見た。可南子はさやかや他の男子何人かとばか笑いをしていた。少し下品だがパワーがあって、他のみんなを引っ張っていくような強い女の子。ずっとそんな女の子になりたいと思っていた。

「俺は藍ちゃんみたいな子、かわいいと思うけどな」

まさるは照れながらそう言った。

「まさる君、積極的～！」

さり気なく見ていた友人の雄大が堪えきれずにそう叫んだ。

「かませ、まさる。お得意の占いを」

俊郎も一緒になって野次を飛ばす。

まさるは「うるせーよ」と男共に言ってから、「手相診てもいい？」と藍に尋ねた。

「え？　うん」

藍は手を出した。

まさるは藍の手首を握り、「えーと、頭脳線が……」と、掌を指でなぞり始める。

その瞬間、藍の脳裏にある映像が蘇ってきた。三年前の夏の夜。花火大会でのおぞましき記憶である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8118w/

海と空

2011年12月19日01時53分発行